

第5期 第5回詳報

311 伝える／備える 次世代塾

南三陸・戸倉小元校長麻生川敦さん

「知識行動に生かして」

東日本大震災の伝承と防

災の担い手育成を目的に河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」第5期は8月28日、第5回講座をオンライン方式で開いた。宮城県南三陸町の元戸倉小学校長多賀城市教育長の麻生川敦さん(64)が、学校防災をテーマに講話し、大学生約60人が受講した。

戸倉小は海の近くであり、震災の大きな揺れの後、教職員は児童91人を連れて近くの高台に避難。津波は3階建て校舎屋上をのみ込んで高台に迫った。一行はさらに高い場所にある神社

境内に移り難を逃れた。

同校の避難マニュアルは避難先を高台と校舎屋上の両方とし、最終的に校長が判断する内容だった。震災の2年前に始まったマニュアル作りは、結果的に避難先を1カ所に絞れなかったが、副産物もあった。

麻生川さんは「議論を契機に津波に関する教職員の会話が增えた。備えについて率直に意見をぶつけ合う中で、防災意識が高まり、津波対策の共通の土台ができた」と話した。震災当日の高台避難、想定外の神社への2次避難は、教員同士の声掛けが行動のスイッチになった。

生川さんは「避難したら絶対に戻ってはいけない」といつも児童に話していたのに引き留められなかった。知識を行動に移せなければ命を守ってあげられない」と強調した。

神社では児童らと共に不安な一夜を過ごしたが、顔なじみの地域住民の結束力が心強かったという。「みんなでお年寄りをはじめ弱い人を大事にしていた。少いだけあった食料も子ども

たちに分けてくれた」と振り返った。

質疑応答で、学生から神社での児童の様子を聞かれると「騒ぐ子が一人もいなかったが、それだけ不安だったと思う」と説明。心の傷について「秋になっても津波の話でパニックになる子がいた。元気に見えるえていても、傷は心の中に刻み込まれていることを覚えておいてほしい」と訴えた。

受講生の声

地域の結束大切

自由闊達に話し合える先生たちの関係性が学校の防災意識を高め、震災が発生した直後も、正解のない中でより良い避難行動につながったのだと思います。地域住民と良好な関係を築くことの大切さについても、防災・減災の側面から改めて感じました。(仙台市青葉区・宮城教育大3年・山下菜央さん・21歳)

命守る力を学ぶ

「知る」だけではなく、臨機応変に行動できて初めて防災に役立つことを学びました。教員を目指しています。想定外の出来事が起こり得る自然災害に備え、自分や周りの人の命を守るために行動できる力を、子どもたちと共に身に付けたいと思いました。(仙台市太白区・東北福祉大1年・高島俊宏さん・19歳)

メ モ 311「伝える／備える」次世代塾を運営する推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、仙台大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。



麻生川敦さん

悔やんでも悔やみきれない出来事も。高台に避難した後、自宅に戻った教員1人が犠牲になった。麻



津波にのみ込まれる戸倉小。教職員、児童は後方の高台に避難した=2011年3月11日、宮城県南三陸町(須藤清一さん提供)

